

『滅罪劫數義』の本文及其解説

戸松憲千代

私がこゝに紹介せんとする『滅罪劫數義』一卷は、曾て九州古城の正行寺に藏せられ、本學々長大須賀秀道先生の新發見にかゝるものである。實は先生御自ら解説の勞を取らるゝ豫定であつたが、公私御多忙の折柄、これを私に御依頼せられたのである。私、淺學無才にしてその任にあらざることを惟ふも、師言もだし難く、敢へて之れを御引受けした次第である。先生のこの御恩顧に對し、幸ひに過誤なからんことを期して止まない。

(一) 著者考

本書はその奥書に

聖曆庚午之歲窮冬甲子之日、爲勸愚者注之、敢不爲智人、猥勿嘲々々。權律師隆寛記矣。

とあつて、隆寛の述作なることに異論はないやうである。しかし、これを隆寛の述作と決定するには、なほ多少の考證を必要とするであらう。何となれば『閑亭後世物語』や『捨子問答』の如く隆寛の撰號を持ちながら、隆寛の撰述にあらざるものがあるからである。そこで私は、本書を隆寛の他の確實なる著書と對檢し、隆寛の述作として間違ひなきことを内容的に論證して見たいと思ふ。

『滅罪劫數義』の本文及其解説(戸松)

さてこれに就き、先づ注目さるべきは

①『散善義問答』（白道釋の條下）に

一念滿十念、十念滿百念。然一念中必有二十念、十念中必有百念、可見滅罪劫數義也。

とある一文である。これに依ると隆寛に本書と同名の『滅罪劫數義』なる一書のあつたことだけは疑を容るゝ餘地がない。しかし、こゝに當然一考さるべきは、本書が此の『散善義問答』に指示せられてゐる『滅罪劫數義』と同致するものなりや否やの問題である。何んとなれば、若し本書が該『問答』指示の『劫數義』と同名異本であつたならば、それは隆寛の述作として否定せられねばならぬからである。しかし、此の問題は本書(第三問答)の左の文が右の『散善義問答』と内容、筆格を一にすることに依つて簡単に解決せらるゝ。

一聲滿是十、十聲滿是百。展轉相望論其滅罪、一念之力當二十之八萬劫、十念之力當二百之八萬劫。百八萬者即是八十億也。

かくて本書を隆寛の眞作たるのみならず、『散善義問答』指示の『滅罪劫數義』なりと見做すに敢へて異存はないであらう。次に

②本書(第十問答)が

愚鈍重罪凡夫、迷修行道闇懺悔法。西土能化憐之、名字之中攝持萬善、若男若女信之以爲因、罪人愚人稱之爲緣。因緣和合佛智觀察、十惡非十惡、五逆非五逆、善惡不二、迷悟一如。

と信心を因とし、念佛を縁とする思想は、『具三心義』下(寫眞三五)の

選擇集云、……但不^シ舉^ゲ増上緣^ヲ者、正助二行中正行豈非増上緣^ニ乎。文云、稱念^{スレバ}即除罪多劫^{ナリ}、命欲^ル終時^{ント}、佛與^ニ聖衆^ヲ自來迎接^ス、諸邪業繫無^キ能礙^{ケル}者^ニ故名^ニ増上緣^ト。

とある文に符節を合し、これも本書を隆寛の眞作とする證左の一に數へてよいであらう。また

③本書(第六・第七問答)が

一念之力雖^モ滅^{スト}無量罪^ヲ、如來巧辨隨^ガ時宜^ニ、故施設區分^{ダリ}。下輩上下其位已異^ニ、不足^ラ一例^{スル}。何況約^ニ所表^ニ論^{レバ}滅罪^ヲ、一念之力能滅^ス五萬劫之罪^ヲ、就^テ此論^ニ滿數^ヲ、又十億劫也。問^フ、所表之意如何。(下略)

と云へる「滅罪所表」の見解は、隆寛の直弟信樂の『觀經定善義問答私見聞』に

難^テ云^フ、若爾者、本願所成依報觀、其滅罪可^シ同^{カル}。而第六觀云^ニ除無量劫極重惡業^ト、第七觀云^ニ滅除五萬劫生死之罪^ト、第八觀云^ニ除無量劫生死之罪^ト、如^キ此等^ノ不同如何。答^フ、諸觀滅罪、其力用可^シ同^{カル}、而^{レドモ}且約^ニ所表^ニ有^ル其不同^ニ也。

とある文に見られ、更に

④本書(第一問答)の

三有之中壽命長久無^シ超^{タルハ}非想天^ノ八萬劫^ニ、故以^テ彼爲^{シテ}本^ト、八十億劫爲^{スル}限^ト也。

は、『閑亭後世物語』(續淨土宗全書四二五)に「隆寛律師云く」として引用せる

三界の内には、非想の八萬劫に過て、壽永き所なし。此八萬劫を百倍重て、生死にかへらずと云ふ文なれば、一念に既に未來生死に流轉すべき罪滅しぬ。是れ正しく極樂に生るべき事を八十億劫の罪滅すと也。

に同致して、これ等は何れも隆寛眞作説の證左として數へられねばならぬものである。

かくて本書は文と云ひ義と云ひ全く隆寛のそれに符合し、すでに了祥師が之れを指摘して「滅罪劫數義は(乃至)、其文も義もよく隆寛に合してゐる。(中略)疑もなく隆寛の作なり。」「(後世物語聞書講義)眞宗大系三十一(三)と云つてゐる如く、隆寛の述作と見做して敢へて差支へないであらう。

(二) 製作年時

本書の製作年時は上引奥書の文に

聖曆庚午之歲窮冬甲子之日、爲^ム勸^ム愚者^ヲ注^ス之、敢^テ不^レ爲^マ智人^ニ、猥^ク勿^レ嘲^ル々^{コト}々。權律師隆寛記矣。

とあるに於いて、その承元四年(皇紀一八七〇)なることは明かである。これは翌々年の建曆二年(一八七二)に隆寛自ら追録せるもので、而も本書の跋文に長樂寺流沙門隆秀なるものが

庚午之歲製作、年代記ヲ見ニ承元四年ニ當ル。同五年建曆ニ改元アリ、辛未ナリ。

と論じてゐるところより見ると、此の承元四年述作説は先づ動かせざるところであらう。然るに、開華院法住師は其著『教行信證金剛錄』(續眞宗大系八(三))に本書の製作年時を論じて

此の滅罪劫數義を書いたは建曆元年冬去冬とあるによつて、十二月元祖御歸洛の月なり。されば元祖面授口決、元祖御そばにありて書きたるものなり。

と建曆元年(一八七二)説を述べてゐるゝが、これは如何がしたものであらうか。本書に異本があつたものか、それとも開華院師の誤謬に依るものか(私には後義と見做したい)。敢へて疑問を提示し、識者の示教を待つ。

(三) 本書の梗概

本書の内容は、已に了祥師の『後世物語問書』(眞宗大系三十一 31a-32a)、法住師の『教行信證金剛錄』(續眞宗大系八 16ab) また近くは大須賀學長の『金澤文庫所藏の隆寛律師遺書と親鸞聖人の教義』(宗學研究第十二號)、安井教授の『法然聖人門下の教學』(305以下)等に紹介せられてゐるから、詳しくはそれ等に譲り、今は簡單に之れを一瞥しておくであらう。

本書奥書の

予天性雖^モ愚^{ナリト}、深信^ニ本願^ヲ、信心無^レ貳^ク、慇懃^ニ念佛^ス。然^{ルニ}一念^ノ之力滅^{スルコト}八十億劫生死罪^ヲ、未^ダ測^ラ其故^ヲ、思惟^ニ日積^ミ、旨趣彌^モ暗^シ、此事屢亂^ニ心^ヲ、殆^{ドル}爲^ニ念佛障^ヲ。爰自然發^ニ智^ヲ、雖^モ成^ズ此義^ヲ、下品下生除^ク五十億劫罪^ヲ、文和會失^ス據^ヲ。

と云へる記事に徴すると『觀經』下々品の「具足十念、稱南無阿彌陀佛、稱佛名、故於念念中、除八十億劫生死之罪」とある「一念滅罪」の意味に就いて

① 一念の力、能く八十億劫の罪を滅するとは如何なる意趣ありや。

② 下々品には「滅八十億劫罪」と云ひ、下上品には「除五十億劫罪」と云ふ、その融會如何。

右の如き二個の疑問に答へたものが本書である。思ふに、一念の滅罪を八十億劫と限定するならば、八十億劫以内のものは往生可能なるも、八十億劫以上のものは往生を否定せられねばならぬ。また下々品では一念の滅罪八十億劫と云ふも下上品では五十億劫と説けば、當然この矛盾を會釋せねばならぬであらう。されば、かゝる點に着目し、これ

を研究主題とせる隆寛は實に賢明と云ふべきであらう。

そこで彼は十番の問答を設けて之を論じてゐるのであるが、その大略は斯うである。一念とか十念とか云ふも、それは單なる數字ではなく、所謂滿數を表した生きた文字である。一と云ふも十を含み、十と云ふも百をはらんだものである。而して八十億劫の語は、三有の中に壽命の最も長き非想天の八萬劫より取つたもので、これを單に文字通りに見るならば一念の滅罪は八萬劫、十念の滅罪は八十萬劫であるが、今の滿數の意味より云へば一念は十念を含んでその滅罪は十の八萬劫、また十念は百念をはらんで、その滅罪は百の八萬劫となるのである。この百の八萬劫即ち八百萬劫が今の八十億劫のことにして、而も『觀經』に十念を本とせるは、十は下一念を攝し上百念を攝し、一より起つて十百を滿すものであるからである。なほ彼は「理實一念十念之力無不滅三世無數劫罪障、唯被迷情一往分別」と述べてゐるが、實に妙解答である。(因に智光の『無量壽經論釋』(拙編「三本對照表」No. 3、大谷學報十九・二)に「億有四位、一者十萬、二者百萬、三者千萬、四者萬萬」とあり。しかれば今の八百萬劫を八十億劫と云ふは、第一義に依るものならん。)

然し、これだけでは未だ「一念滅罪」の意味が顯れてゐない。そこで彼は

問、十念力滅八百萬劫罪者、何故經曰於念々中除八十億劫生死之罪乎。

と發問して、これに二義を以て答へてゐる。第一義は、「念々中除八十億劫」とは一念が積つて十念になつた時に滅罪すると云ふのである。然しこれは一往の解釋で、彼の真意が第二義にあることは云ふまでもない。第二義は、十念は百念を含み、一念はその百念を含んだところの十念を孕むのであるから「念々中云云」と云ふのである。これは勿論天台の「十界互具」の思想に立つたものであるが、實に一念の稱名は百念の稱名を、否な無量の稱名をはらむのであつて、

一念はそのまゝ多念、多念はそのまゝ一念に融ぜられて、こゝに「一念減罪」の義が成立すると云ふのである。

次に第二の下々品と下上品との會釋に就いては

答、一念之力雖^モ減^{スト}無量罪^ヲ、如來巧辨隨^ガ時宜^ニ故施設區分^{タリ}。下輩上下其位已異^{ニナリ}、不足^ラ一例^{スルニ}。何況約^ニ所表^ニ論^{レバ}減罪^ヲ、一念之力能減^ク五萬劫之罪^ヲ。就^テ此論滿數^ニ、又十億劫也。^{（五？）}

と答へて、二義をあけてゐる。その意味は、如來の教説は時宜に隨つて施設せられたものであるから必ずしも一定しない（これ第一義）、また一經の所表に約し滿數に約するときは、二者矛盾するものにあらず（これ第二義）、と會釋せるものである。

そこで、この後義に就いて少しく解説を施すならば、所表に約すとは下々品は上述の如く非想天の八萬劫を所表としたものであるが、下上品は華座觀の五萬劫を所表として、それより取つたものである。五萬劫とは、一道の罪を一萬劫とし、一念は三界五道を永離するから「除五萬劫」と云ふのである。而して今下上品に除五十億劫と云ふは、滿數に約して一念に能く百念減罪の用あることを顯したものである。そこで彼は

約^シ所表^ニ約^{シテ}滿數^ニ一往分^{スレバ}別五十億劫^ト與^{トラ}八十億劫^ト、多少似^{ゾモルニ}有^ニ異^ニ、以謂^テ之^ヲ念々減^ニ無量劫罪^ニ生^{ズルコト}西方安樂土^ニ一同無^ニ差^一。

と、下々品と下上品と相異なきことを結んでゐる。實に妙味津々たるものがあるであらう。

最後に、彼は此の一念減罪の徳用は自力なりや他力なりやの間に答へて、自力に依らず専らこれ他力なりと述べ、更にその他力の相狀を示して

答、愚鈍重罪凡夫、迷^ヒ修行道^ニ闇^シ懺悔法^ニ。西土能化憐^ニ之^一、名字之中攝^ニ持萬善^ニ、若男若女信^レ之以爲^レ因、罪人愚人稱^レ之^ニ爲^レ緣。因緣和合佛智觀察^ニ、十惡非^ニ十惡^ニ、五逆非^ニ五逆^ニ、善惡不二^ニ、迷悟一如^ニ。宜哉、無始流轉之生死一聲之中斷滅、無始本有之依正一念之間感見^ニ、可^レ思^レ可^レ知^ル。光明攝取、奇雲來迎、天外細樂、室內異香、觀音蓮臺、勢至授手、化佛來現、聖衆圍繞^ニ、皆是彌陀本願力之所^レ致也。豈爲^ニ凡愚自行力之所^ニ及^ハ乎。此其他力相矣。

と論じてゐる。

かくて、彼の一念滅罪の義は要之に「信因稱緣」を内容とする本願他力の義に究竟する、のであつて、こゝに私は彼が本書の表紙裏に表掲せる『論註』(下333)の「緣佛願力故十念々佛便得往生得往生故即勉^(免?)三界輪轉之事無輪轉所以得速^(故の一字脱)」なる一文を關想せずにはゐられない。初め私は此の論文を了祥を中心とするその周圍の人々、或は少くとも隆寛以外の何人かに依つて竄入せられたるものにあらざるやと思つたのである。然し今日隆寛の遺著として殘存するものを眺むるに、その全般的に渡つてしばしば『論註』を引用し、而も『論註』は隆寛教義の背景たり根據たると思つさるゝものがあるから、これはやはり、隆寛自らの揭示と見るが隱當のやうである。果して然らば、それは本書に對して如何なる意味を持つものであらうか。云く、本書一卷の正所明たる「一念他力」の思想は實に此の『論註』に基くものであつて、更に云はゞ本書の一部全體はその究竟するところ、この論文に内攝さるゝことを意味するものにあらざるか。大方の吐正を仰ぐ。

(四) 本書の體裁と流傳

先づ體裁より一言すると、本書は大和綴、縦八寸六分横五寸八分、表紙を合せて僅々六紙ばかりの小冊子である。一紙二十行、一行約十八字を止め、その書體は楷書にして、まゝ蟲食あるも概して鮮明である。故住田先生は之れを了祥師の影寫にかゝるものであらうと鑑定してゐられたが、恐らくそれに相違ないであらう。

次に本書の流傳に就いて考ふるに、跋文に

于時文明九年丁酉八月廿九日 長樂寺流沙門隆秀年齡廿五 在書判

とあり、また

雖爲他流抄爲且自見且興隆佛法令買^(得?)德者也天文十二^{癸卯}三月八日來迎寺桑門康松^六書判 往生以後寺家寄進可申候

とあつて、初め長樂寺流の隆秀に屬してゐたものが、天文十二年(二二〇三)の頃來迎寺の康松なるものゝ手に渡つたのである。その後の流傳關係は曖昧模糊として忖度するに由ないが、やがて我が派の了祥師に歸屬せらるゝことゝなつたのである。これに就いて了祥師は『後世物語聞書講義』(眞宗大系三十一卷)に

第三には滅罪劫取^テ義。これは世に知つた人もない書ぢやが、昔古本を求めて置いた。其終に隆寛の自記有り。また文明九年八月二十九日長樂寺流の沙門隆秀年二十五とある。これ三百五十年前の古い寫本ぢや。其文も義もよく隆寛に合して居る。これも閑享後世下^{十四}右隆寛滅罪の説を擧ぐるに合しておれば、疑もなく隆寛の作なり。

と述べてゐるが、この記述に依ると了祥の所持本は少くとも三百五十年前の古寫本であつたらしいことが窺はるゝの

である。然るに今回新しく發見せられたる本書は、如上一言せる如く了祥の影寫にかゝるもので、その筆勢から云つても、紙質から見ても、到底かゝる古きものとは考へられない。古城の正行寺は曾つて皆往院、雲華院兩師の所住たりし寺であるから、二師の何れかの需めに應じて、了祥師自ら本書を右の古寫本より轉寫し、寄贈したものであらう。されば、本書は了祥師所持の古寫本の系統に屬するものではあるが、その古寫本とは一往別個のものとは考へられねばならぬのである。

然らば開華院師の所覽本は如何なる系統に屬するものであらうか。思ふに法住師は了祥師の門下として、了祥師の膝下に永く薰育を受けた人であるから、それは當然了祥師の古寫本に系統するものと思考せられねばならぬ。而して、こゝに左の如き二種の場合が考へらるゝであらう。

①了祥師の古寫本を彼が直接見たと見る場合

②この古寫本より了祥師自ら轉寫して彼に與へたと見る場合

何れにしても、本書と開華院師所覽本とは系統を同じうするものであつて、以下參考の爲め兩書を對照しておかう。

問、一念難思利益爲^{ハム}自力^{トヤム}爲^{ハム}他力^{トヤ}。

答、不^レ依^ニ自力^{ニハ}專^ラ是他力也。

問、他力相如何。

答、愚鈍重罪凡夫、迷^ヒ修行道^ノ闇^シ懺悔法^ニ西土能化憐^シ之^ヲ名字之中攝^{シテ}持^{シテ}高

問、一念十念難思の利益は、自力とやせん他力とやせん。

答、自力にあらず専らこれ他力なり。

問、他力の相云何ん。

答、愚鈍重罪の凡夫、修行の道に迷ひ、懺悔の道に暗し。西土の能化これ憐み、名號中に萬善を攝治し、若男若女これを信すれば因となり、

善^{ナリ}、若男若女信^{レバ}之^ヲ以^テ爲^リ因^ト、罪人愚人
 稱^ニ之^ヲ爲^ル緣^ト。因緣和合佛智觀察^{シタフニ}、十
 惡非^{モズ}二十惡^ニ、五逆非^{モズ}五逆^ニ、善惡不二^{ニシテ}、
 迷悟一如^{ナリ}。宜哉^{ナル}、無始流轉之生死一聲
 之中斷滅^シ、無始本有之依正一念之間感^{スルコト}
 見^シ、可^フ思^ル可^ル知^ル。

〔『正行寺本』本學圖書館藏〕

罪人愚人これを稱すれば縁となる。因緣和合して佛智觀照し給ふに、十
 惡も十惡にあらず、五逆も五逆に非ず、善惡不二、迷悟一如、宜なる
 哉、無始流轉の生死一聲の中に斷滅し、無始本有の依正、一念の間に感
 見す、可^レ知可^レ思。

〔開華院師』所覽本』續眞宗大系八 p.16〕

文字の出沒等多少はあるも、概して文勢を等しうし、兩書の同一系統に屬するものなることが知られよう。

(五) 『滅罪劫數義』の本文

〔凡 例〕

- 一、原本の丁附は「印を以て傍註した。(例へば「三」とあるは三丁右なることを示す。)
- 二、引用の經論釋文は力の及ぶ限り、その出據を検索し、冠註に附することゝした。
- 三、送り假名、返り點は原本のまゝを踏襲せるも、明かに誤謬と思はるゝものを？印を附して傍註した。
- 四、冠註に第一問答、第二問答等とあるは、専ら讀者の便宜を顧慮し、私に附したものである。

滅罪劫數義 全

①論註(下334)

〔表紙裏〕往生論注下云、緣佛願力故十念々佛便得往生得往生故卽勉(免?)三界輪轉之事无輪轉所以得速文(轉の下故の一字脱?)

滅罪劫數義

②第一問答

問②①一念滅八十億劫罪有何故耶。答、佛之密意弘深難測、今試述二義扶愚者信心。一聲稱名功力長別三界生死、略取滿數顯此義也。所以者何、三有中壽命長久無超非想天、八萬劫故以彼爲本、八十億劫爲限也。

③第二問答

問③②若依此義、可謂八萬劫答其義、雖然言八十億劫者、十聲稱佛聲々取滿一往定數。

④第三問答

問④③取滿數樣如何答、一之滿是十也、十之滿是百也、百之滿是千也、千之滿是萬也、萬之滿是億也、料知一聲滿是十、十聲滿是百、百聲滿是千、千聲滿是萬、展轉相望論其滅罪、一念之力當十之八萬劫、十念之力當百之八萬劫、百八萬者卽是八十億也。

⑤ 第四問答

⑥ 『法華讚』
(一、19b)

⑦ 第五問答

⑧ 第六問答

問^⑤何故取滿數耶。答凡取滿數源起本願所謂第十八願十念也。於十念中一二三念無失四五六念悉收七八九念皆攝以何得知。經曰信心歡喜乃至一念即得往生住不退轉明知十念願中決定成就一念往生善導云三念五念佛來迎直爲彌陀弘誓重致使凡夫念即生勿疑十念願中決定成就三念五念往生經文釋文從一至九十念之中含藏甚明以十念爲本之時下攝一念上攝百念十者始起自一終滿千百故也。今依其滿數滅八百万劫罪而已。理實一念十念之力無不滅三世無數劫罪障唯被迷情一往分別

問^⑦十念力滅八百万劫罪者何故經曰於念々中除八十億劫生死之罪乎。答以二意會之。一者念々相并十念之中滅八十億劫罪也。二者十念之中一之念自有十念於此十念又有百念故念々滅八十億劫罪也。例如天台宗十法界中一一法界具十法界成百法界故一一法界所具十如是即成千如是。竊案道理依一念信速得往生無始已來生死之罪一時滅盡更雖不可定劫數隨事辨數之時取百劫千劫乃至取塵點劫不可相違矣。

問^⑧經說下品上生曰合掌叉手稱佛名故除五十億劫生死之罪一聲稱名彼此既同滅罪劫數何有異乎。答一念之力雖滅無量罪如來巧辨隨時宜故

⑨ 第七問答

施說區分^{ナリ}下輩^ニ上下其位^ニ已異^{ナリ}不足^ラ一例^{スルニ}何況^ニ約所表論^ニ滅罪^ヲ一念之力能滅^ス五萬劫之罪^ヲ就此論滿數^ヲ又十億劫也^{（五）}。

問^⑨所表之意如何答、一念之力永離^ル五道^ヲ今取^{ルコトハ}五萬劫^ヲ爲顯^メ此義也^{（一）}一一之道各取^ル方劫^ヲ生死^ヲ於無始生死^ニ中且取^テ萬劫^ヲ以爲言端^ト蓋是經教常習^{ナリ}矣。

⑩ 第八問答

⑪ 觀念法門^{（10）}

問^⑩此義有明證耶答、觀經曰、作華座想^{（作の下此の一字脱？）}……此想成者滅除^{シテ}五萬劫生死之罪^ヲ必定當生^ニ極樂世界^ニ善導引^テ此文云、日夜觀想^{スルハ}者現生念々除滅^ス五十億劫生死之罪^ヲ經言^{フハ}五萬劫者指^ス一念滅罪之用^ヲ是即約^チ所表^ニ其義^ニ如^シ上^ニ述^ニ釋言^ニ

五十億劫者指^ス百念滅罪之用^ヲ是即約^チ滿數^ニ所謂十念滅^ス五億劫^ヲ罪^ヲ十念者一^ニ百念滅^ス五十億劫^ヲ罪^ヲ百念者十^ニ例如念々之中滅^ス八十億劫^ヲ生死^ヲ罪^ヲ之義^ニ約^シ所表^ニ約^シ

滿數一往分別^{スレバ}五十億劫^ト與八十億劫^ト多少似有^{ドモルニ}異^ニ以謂^バ之念々滅^ニ無量劫^ヲ罪^ニ生^{ズルコト}西方安樂土^ニ一同無差^ニ善導和尙得^{「ゴト}佛意應^ヲ知^ル。

⑫ 第九問答

⑬ 第十問答

問^⑫一念難思利益爲^{ハム}自力爲^{トヤム}他力答、不依^ラ自力專^ニ是他力也。

問^⑬他力相如何答、愚鈍重罪^ニ凡夫迷修行道^ニ闍^シ悔^ハ法^ニ西土能化憐^デ之^ヲ名字之中攝^ニ持^{シテ}万善^ヲ若男若女信^{レバ}之以爲^リ因^ト罪人愚人稱^{レバ}之爲^レ緣^ト因緣和合佛智觀^ニ察^{シタツニ}十惡非^{モズ}十惡^ニ五逆非^{モズ}五逆^ニ善惡不二迷悟一如^{ナリナル}宜哉^{（一）}無始流轉之生死一

聲之中斷滅、無始本有之依正一念之間、スルコトシ感見、シ可思、ル可知、光明、攝取、奇雲、來迎、天外、細樂、室內、異香、觀音、蓮臺、勢至、授手、化佛、來現、聖衆、園繞、(園?)皆是、彌陀本願力之所致也。豈爲凡愚自行力之所及乎。此其他力相矣。

⑭ 10b

⑮ 30a

⑯ 禮讚(30a)

⑰ 『玄義分』(4b)

聖曆庚午之歲窮冬甲子之日、爲勸愚者注之、敢不爲智人、メナラ狼勿嘲々々々。權律師隆寛記矣。予天性雖愚、深信本願、信心無貳、懇懃念佛、然一念之力滅八十億劫生死罪、未測其故、思惟日積、旨趣彌暗、此事屢亂心、殆爲念佛障。爰自然發智、雖成此義、下品下生、除五十億劫罪、文和會失據之間、於觀念法門中、忽得證誠、先年之比、恒可係心於華座、觀之由有夢想之告、其後、觀經第七觀文并禮讚中、七言八句、偈僅以諦誦許也、敢不辨幽旨、而今就華座觀文、既察和尙深意、又推本願密意、往日之夢、豈非告示此事哉、竊以經云、如此妙華、(華の下是の一字脱?)本法藏比丘願力所成、若欲念彼佛者、當先作此華座、想釋云、彌陀本願華王座、又云華座一觀、是其別依、唯屬彌陀佛也。料識阿彌陀即本願名也、華座即本願鉢也、以法藏因感極樂果、此因果即本願宗也、滅多劫罪、得生彼國、即本願用也、此經一部、即本願教也、彼一部、即本願教也、彼一夜奇靈夢、今多劫滅罪義、情案始末、宛同府契、感淚如雨、見者勿疑、而

已、建曆二年正月四日追^テ以^テ錄^ス之^ヲ。

一〇二

于時文明九年丁酉八月廿九日

長樂寺流沙門隆秀年齡廿五 在書判

庚午之歲製作、年代記ヲ見ニ承元四年ニ當ル。同五年建曆ニ改元アリ、辛未ナリ。

雖^{〔云〕}爲他流抄爲且自見且興隆佛法令買^{〔得〕}德者也

天文十二癸卯三月八日來迎寺桑門康松^六書判

往生以後寺家寄進可申候

書置モ袖コソヌルレモシホ草

ミルメノ日カスホトハアラシナ